

全校の皆さん、おはようございます。

信州の冷え込みは一気にくるといいます。吐く息が白くなったり、校庭の木々や校舎からみえる山々が紅葉したりと「秋」を感じますね。

さて、先日は報恩講が勤まりました。仏教の授業の中でもあったと思いますが、報恩講は親鸞聖人亡きあとに、門弟たちが聖人を偲んで、御命日に集ったことが起源とされています。その後、形式化され数百年の歴史をくぐって今日まで関係の寺院や学校などで勤められてきました。

伊那西高校では多少の形式の変更はあったものの創立以来一度も欠かすことなく、この報恩講を勤めています。

皆さんは授業やホームルームで、「この行事が一番大事である」と言われました。しかしながら実際は、何が大事なのかわからない。ひいてはやる必要があるのか。と思うことがあるかもしれませんね。そして、このような問いに明確にこうだ、と言える人もあまりいないのかもしれませんが。

ところで宗教行事の際に必ずステージ正面に「あるもの」がありますが、何かわかりますか？あれは「本尊」といいます。本尊とは「本心に尊いもの」「本心に大切なもの」ともいいます。伊那西高校では「阿弥陀如来」の絵像が掲げられています。「阿弥陀如来」というのは実在した人物ではなく、釈尊（仏）が目覚めた教え（法）を形として表したのになります。

教えに目覚めた釈尊は心の底から喜びました。それと同時にこの教えをどのように人々に伝えるべきかとためらったともいいます。その後、意を決して人々に教えを伝えたところから「仏教」がはじまりました。

では、釈尊の喜びとはいったい何だったのでしょうか。今回報恩講の講師として話をしてくれた木越康先生は、その喜びを「目に見えないもの」といわれました。

「目に見えないもの。」それはいったい何でしょう。

釈尊が目覚めた教えを記録した経典には「この世におけるすべての物事は常に変化してとどまることなく、一つとしてそれ自体単独で成り立つものではなく、他との関係において成り立っている」と書かれてあります。いわれてみれば当たり前のことですが、現代社会は、そのことに気づかないかのように、自分のことと他人のことを区別し、自分に関係があると思われることだけにとらわれて生活しているような気がします。それは「目には見えないもの」を無いものとし、「目に見えるもの」ばかりを追い求めていること言い換えることができます。

「いちばん大切なことは目に見えない」と有名な言葉もあるように、「本当に大切なもの」は見えないからといって無いのではなく、見えないけれども確かにあるのです。現代を生きる私たちに教えを伝えてくれた先人たち（僧）もきつと、教えを通して、「本当に大切なもの」にふれ、喜ばれたのでしょうか。